

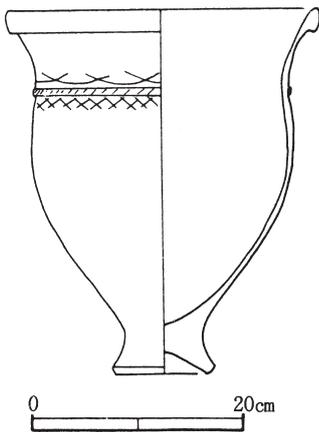
(熊毛郡中種子町大字田島字輪之尾)

**位置と環境**

遺跡は、町の中心部から南西に6km離れた海岸段丘に落ちる手前の標高約100m台地上に立地している。最近の分布調査等によりこの周辺には、縄文時代の遺跡が広く分布することも明らかになってきている場所である。また、本遺跡から南西に1km離れたところに苦浜貝塚が立地し、その間に位置する標高70m前後の砂山は砂採取が盛んに行われ、その下や砂層中から弥生式土器や市来式土器などが確認されている。

**調査の経緯**

昭和27年10月26日、輪之尾集落の雨田清蔵所有の畑地に遺物が散乱していることを知った盛園尚孝が南界中学校生徒の協力を得て、翌28年6月28日と同年12月25日から3日間かけて調査を行った。これより以前の開墾により遺跡の中心と考えられるところは壊されており、今後の開墾等による遺跡の破壊を恐れた調査者の努力により実施された。

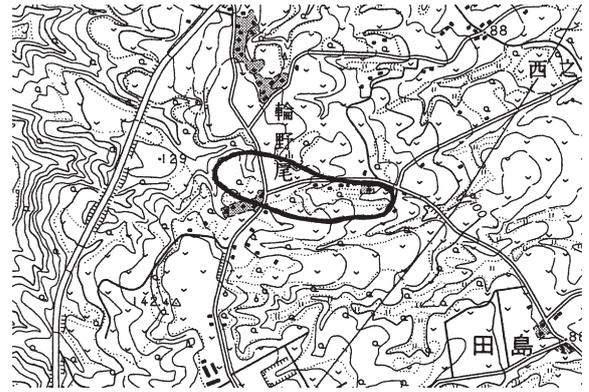
**遺構と遺物**

第2図 輪之尾式土器

遺物包含層は、地表面から約50cmの深さの黒色土中にあり、下層は約20~30cmの火山灰層である。

本遺跡出土の遺物は、弥生時代後期のもので口縁部が肥厚し、脚台を有する新形式の土器(第2図)として輪之尾式が設定された。そのほか土師器、須恵器、磨製石斧、打製石斧、磨製石鏃、滑石製石皿、砥石などの出土が報告されている。

輪之尾式とした甕形土器以外では、壺形土器(2・3)と鉢形土器(4)、土師器(5)がある(第3図)。調査後、土地基盤整備事業によりアカホヤ火山灰層下から縄文時代早期の塞ノ神式土器(第4



第1図 輪之尾遺跡の位置

図7・8・9・10・11・12・13・14)・磨石・敲石(第4図15・16・17・18)石鏃などの遺物が採集されている。

**特徴**

本遺跡において特筆すべきことは、弥生時代後期において、甕形土器に伴って土師器・須恵器がみられることから南九州地域よりも弥生時代の幅があったものと考えられることである。

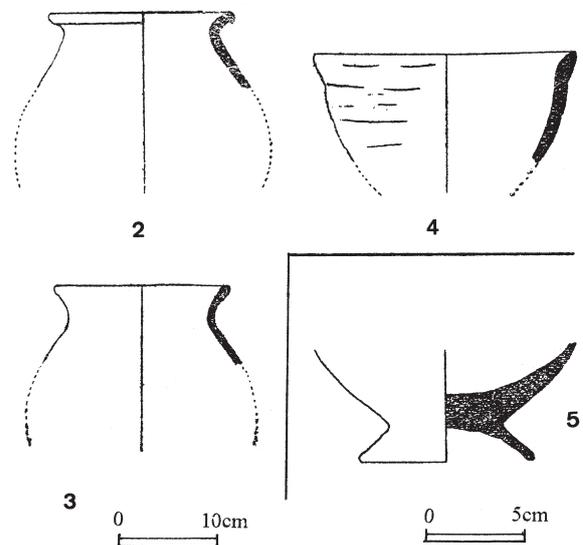
**資料の所在**

出土遺物は、盛園尚孝宅に保管されている。

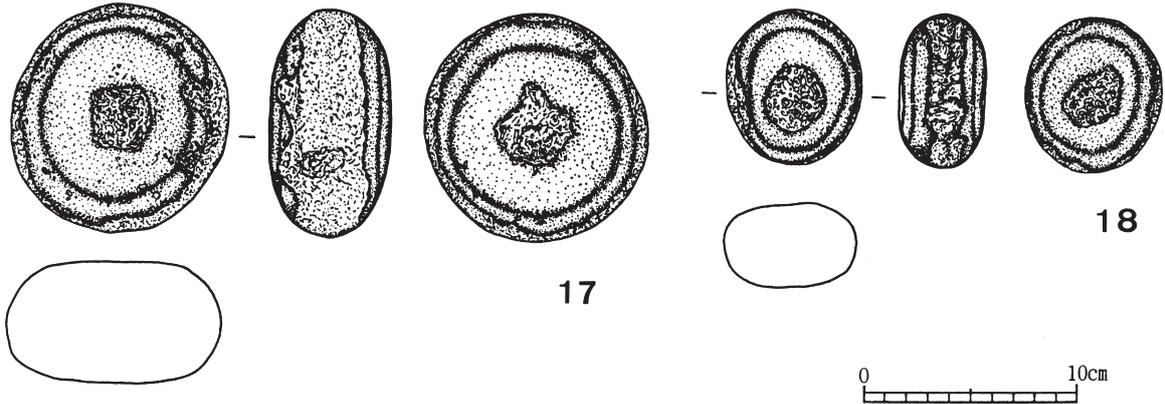
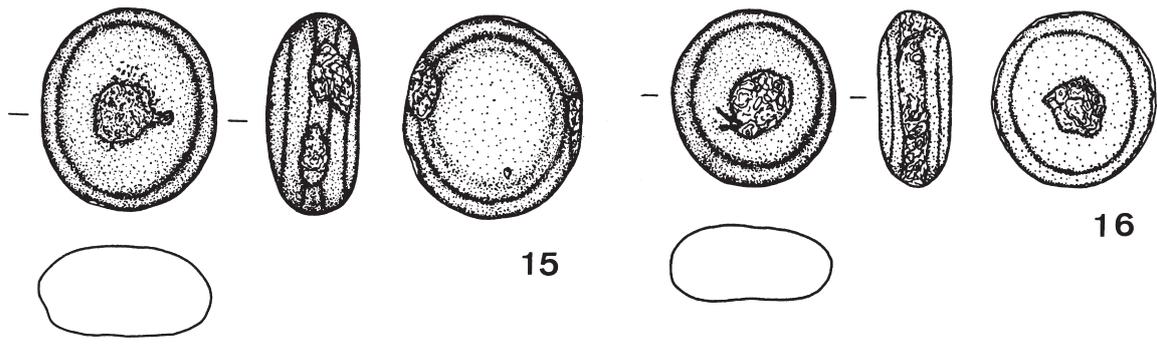
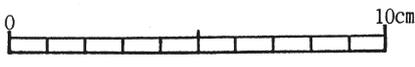
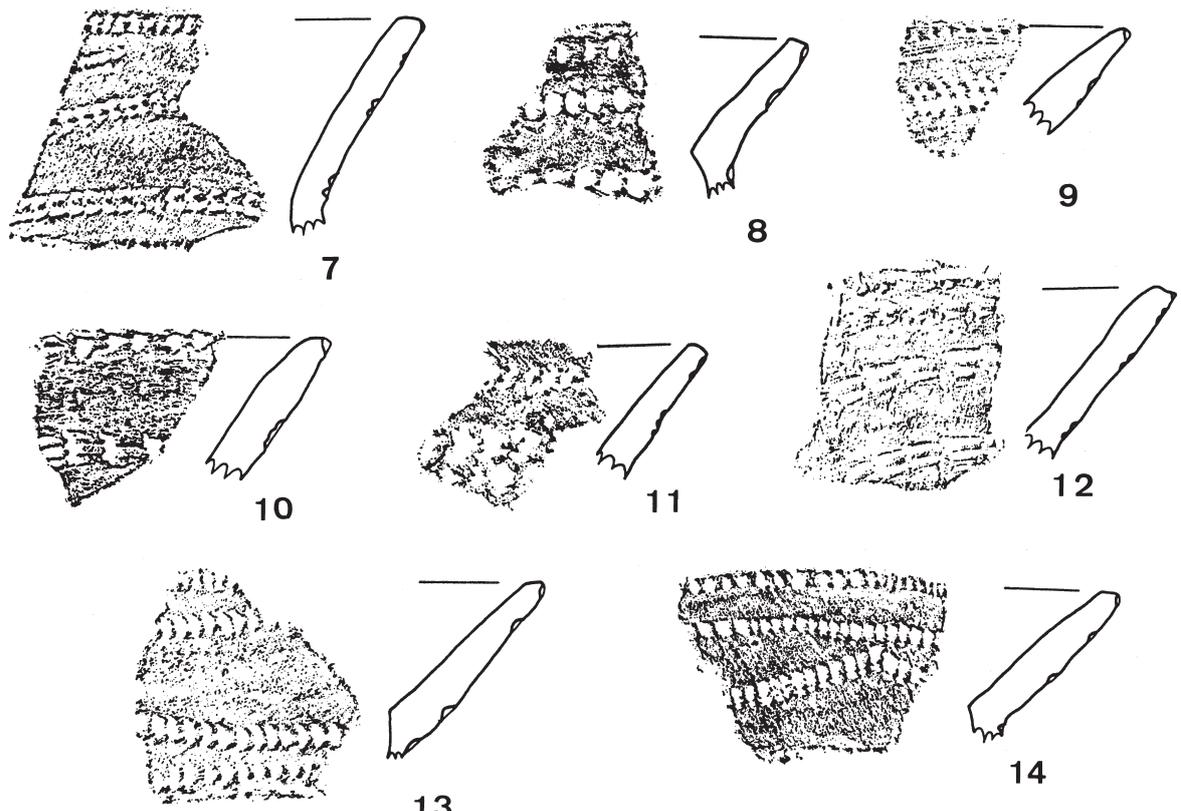
**参考文献**

盛園尚孝1955「鹿児島県熊毛諸島の弥生文化Ⅰ—中種子町輪之尾遺跡のその示す意義—」『古代学研究』第12号

(田平祐一郎)



第3図 輪之尾遺跡出土遺物



第4図 縄文時代早期出土遺物